

面白い本。こんなにオープンにしてよいのかと思うほど。

僕は、キーボードを叩いて文章を書く。1時間当りに換算すると6000文字を出力できる。これは、キーボードを打つ（僕の）指の運動能力の限界であって、僕はこれ以上速く打てない。小説の執筆は、僕の場合、頭の中の映像を見て、それを文章に写す作業である。その映像はほとんどリアルタイムで進行するから、ゆっくりと書き留めていては間に合わない。したがって、この数字よりも遅く打つことができないのである。

指が疲れるので、15分くらいで離脱し、映像の方に待ったをかける。だから1時間ぶっ続けで打てるわけではない（30分くらいが限界だろう）。途中で休む（というか、遊んでいるわけだが）ことになる。小説以外の、たとえば本書のようなエッセイの場合は、多少はゆっくり落ち着いて書くことが可能なので、時間当りの文字数はもう少し（2割程度）少なくなる。

6000文字というのは、原稿用紙にして約20枚なので、1枚5000円 of 原稿料だと、この執筆労働は、時給10万円になる。

ただし、書けば即完成原稿かという点、そうはいかない。手直しをする必要があるし、また印刷のまえにゲラ（校正用の試し刷り）のチェックもしなければならない。したがって、ほぼこの半分くらいになると考えてもらって良い。それでも、時給5万円というのは、数字だけ見れば、もちろんとても良い条件だと思われる。ただし、誰でもが、この条件で仕事ができるわけではない。まずは仕事の依頼が来なければならない。

印税というのは、法律などで額（あるいは比率）が決まっているものではないらしい。普通の書籍の場合は、僕が聞いた範囲では、印税率は、本の価格の8%~14%の範囲であり、僕自身が経験したのは、最低が10%で最高が14%だった。

メフィスト賞を受賞してデビューした作家が何十人も出ているのだが、メフィスト賞に応募しないで受賞したのは僕だけである。ちなみに、このメフィスト賞は、賞金がない。本になることが報酬である。いちおう、小さなホームズ像（前ページの写真1）が贈呈されるが、これはロンドンにあるシャーロック・ホームズ博物館の土産物として10ポンドで売られているものだ（日本のビジネスマン風の男がまとめ買いしたせいなのか、最近少し値上がりしたそうだ）。

この作品は、ノベルスの初刷は1万8000部だった。発行は4月。その後9カ月の間に第6刷まで増刷され、初年に6万1000部になった。これは印税にすると約600万円になる。また、この作品以降、3カ月ごとに新作が発行された。『すべてがFになる』が発行されたときには第5作まで書き上がっていたので、連続出版となったわけである。



写真-1 メフィスト賞のホームズ像

「理系ミステリィ」

というのは、たしかに宣伝文句に使われた。だが、これはどちらかというとマニアックな響きがあって、一般の大多数の読者には敬遠されただろう。理系と問いただけで手に取らない人の方が、この界限には多いのである。

実際にも評判は芳しくなく、あちらこちらで散々に酷評された。「ミステリィに恋愛を持ち込んでいる」とか、「人間が描かれていない」とか、「専門用語が多くさっぱりわからない」といったものだ。したがって、ベストセラにもならなかったし、雑誌などでも大きく取り上げられていない。「このミステリィが凄い」と言われるようなこともなかった。

ただ、僕自身としては、「こんなマイナな作品なのに、意外に売れたな」という感想を持った。正直なところである。初版の1万8000部が売れ残らなければ良いが、と心配していたので、早々に増刷が決定したときには、「世の中にはオタクが意外に（僕が予想している以上に）多いのだな」という、灰かな手応えを感じた。

僕の担当編集者の一人は、「増

刷というのは、お札を刷っているみたいなものです」と話していた（1万部、2万部単位での大量増刷になると、まさしく1000円の本なら500円札を刷っているのと同じことになる）。

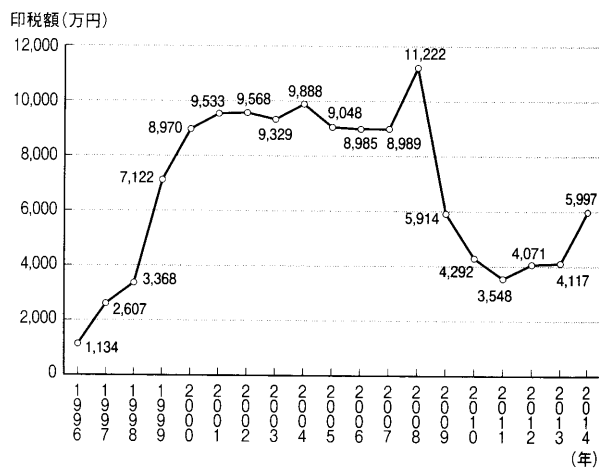


図-1 印税額（印刷書籍のみ）の推移

今年（2015年）の6月に、養老孟司著『**文系の壁**』（PHP研究所）という新書が出るが、内容は、養老先生が4人の理系人と対談をしたものである。その4人のうちの1人が僕だった。養老先生の著作は、かなり以前から多数読んでいて、僕はファンである。それで、オフアがあったときにすぐに引き受けたのだが、この本では、対談をした4人に1%ずつの印税が支払われる条件になっていた。養老先生が4%だったと思う（確認していない）。残りの2%をライクが取るのだろう（これも想像）。この文章を書いている現在は、まだ出版まえなので数字は示せないが、森博嗣の新書に比べたら、養老孟司の新書はきっと10倍は売れるだろうから、1%といっても、自分で1冊書くくらいの金額になるのではないかと予想している（希望的観測）。

新人は、とにかく良い作品を次々発表するしかない。**発表した作品が、次の仕事の最大の宣伝**になる。それ以外に宣伝のしようがない、と考えても良い。したがって、最初のうちは、依頼側が期待した以上のものを出荷する。価格に見合わない高品質な仕事をして、割が合わないと感じて、それは宣伝費だと理解すれば良い。**最も大事なことは、多作であること、そして遅れないこと**。1年に1作とか、そんな悠長な創作をしていては、たとえ1作当っても、すぐに忘れ去られてしまうだろう。

原稿料や印税と同じく、この解説も報酬が事前にほぼ決まっている。出版界では、慣例として定められている料金が**多い**のだが、仕事というのは、本来引き受ける側が料金を設定するものだ。もし、仕事が欲しかったら安くし、面倒なものは高くする。したがって、いずれも作家から料金を提示するのが自然だろう。少なくとも、出版社と作家の間で交渉の機会があつてしかるべきだ。

解説の料金を25万円に引き上げたあとも、依頼があつた。出版社の編集部は驚いたようだが、その金額で折り合いが付き、僕は気持ち良く仕事をした。

ほかにも、自分で値段を決めたものとして、**講演料がある**。1時間40万円と決めている。この金額は安くはないが、高くもない。ごく普通の相場である。詳しいことは後述する。

現在では、電子書籍の印税率は15%~30%が多いようだ。定価の15%とか、最終価格の30%とかが作者の取り分になる。残りを出版社と電子書店で分け合うことになる。電子書籍は、価格も自由に変えることができるので、安売りが頻繁に行われるが、この場合の印税については、元の値段で計算するのか、売れた値段で計算するのかは契約時に定められる。

「出版」というもののハードルは、かつてよりもずっと低くなっているが、その分、多くを売ることは難しくなっている。本が出たというだけで喜んではいけない時代である。しっかりと部数を把握し、それを増やしていくためには何が必要なのかを、**作家は自分で考え、戦略を立てなければならない**。出版社はそこまで考えてはくれない。それよりも、**もっと売れる作家を探す方がずっと簡単**だからだ。

オリジナルのものを作る（創作する）ということは、しかし、「労働」だけで評価をされる行為ではない。ここが重要である。ただ文字を書くだけの作業ではない。既にある話を書き写すのではないし、また似ているものも非難を受けるだろう。新しさがなければならない。そのうえ、大勢に受け入れられる要素がなければならない。絶賛してくれる人が10人いてもしかたがない。文句を言われながらも、**何千人、何万人という人たちに**出費をさせるだけの魅力が個々の作品に必要なのだ。この部分が、なかなか具体的なノウハウとして文章化できないところでもある。

本章の最初に挙げた1作品の印税収入でもわかるとおり、小説家は過去の仕事に対して報酬をもらえる職業である。しかも、作家本人が死んでも、本が売れ続ければ遺族に印税が何十年も支払われる。こういった仕事は珍しいだろう。他分野で似ているものとして特許がある。著作権も特許権と同じ性格のものだが、特許よりもずっと保護される期間が長い。

小説は芸術なのだ、とときどき思い出すのである。

サイン会は、出版社の広報部（営業）と書店が企画するものだが、いったい誰が得をするのかよくわからないイベントである。もちろん、そこにたまたま来ることができた読者は得をするが、せいぜい100人だから、もし1万部売れる本であれば、僅か1%の客にだけサービスしたことになる。書店は、本が100冊売れるが、この利潤は数万円だろう。出版社の人もスタッフとして駆けつける。**みんな仕事をしたつもりになっているのだが、宣伝効果はほとんどない**といって良い。ただ、書店の店長が、作家を呼ぶ力があると誇示できる、というくらいがメリットである。

ラジオでも TV でもそうだが、インタビューがこちらへやってくる場合（つまり、取材）には、**出演料はない**。こちらから、スタジオへ出向いて話をするとき、出演料がもらえる。そういう仕来りらしい。どちらも、話すことは同じなのに、場所が違うというだけで区別されているようだ。

出演する場合は、飲みものが出たり、弁当が出たりといったサービスもあるが、こちらへスタッフがやってくる場合には、彼らにお茶を出さなければならない（ならないわけではないが、人情的にサービスしてしまう）。今一つ納得がいかない。

もともと、大学の仕事に不満があったから小説を書いたというわけではない。ただ、**趣味に使うお金が欲しかった**だけだ。しかし、あっという間に（デビュー初年から）大学教官の給料よりも多くの額を小説で稼ぐようになってしまった。

あまりに忙しいので、とても躰がもたない。もともと体力がない不健康な人間だし、既に 40 代である。まず、大学に辞表を出したが、その後も数年は引き止められて勤務を続けた。助教授を辞したのは 2005 年、非常勤講師をしてもう 1 年勤めているので、大学を辞めたのは 2006 年になる。このとき、周囲のみんなから、「作家活動に専念するのですか？」と尋ねられたが、僕にはそんな気持ちは微塵もなく、**できれば、どちらも辞めたかった**のである。

しかし、執筆依頼はひっきりなしにやってくる。書いてしまうと、雑誌に載り、単行本になり、ノベルスになり、文庫になり、と仕事が続く。1 年に二十数冊以上の本が発行されていたのだ。デビュー以来、発行した印刷書籍の数を次のページの図-2 に示す。

ご覧のように、引退する以前には、毎月 2 冊以上も新刊が出ていたのである。これをどうやったら減らせるのか、と考えた結果が

「引退」になった。それが 2008 年末のことである。

自分の HP で、これから書く作品はこれだけです、と発表し、それ以外の仕事は受けない、インタビューも講演も一切受けない、と書いた。作家の協会も脱会し、出版社の編集者とも会わないことにした。2009 年は、前年に予定が決まっていたこともあってあまり減らせなかったが、2010 年からは、仕事が半減し、引退の効果がようやく表れたといえる。

こうして、**1 日に 1 時間だけ小説の仕事をする引退作家**になった。現在は、**1 日のほとんどを遊んで暮らしている**。ただ、これまでに稼がせてもらった出版社（特に、そのときの編集者）には「では、さようなら」と簡単にはいかない。ほんの少しだが、依頼を引き受けている。

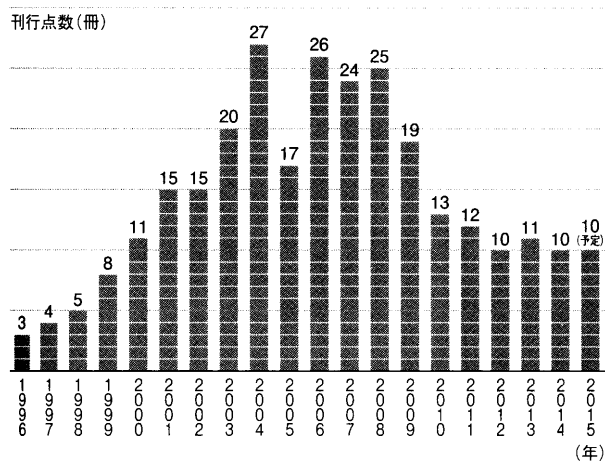


図-2 刊行点数の推移

森博嗣作品が映像化に向かないのは、小説というマイナ分野だからこそ許される、というようなタブー的な展開のものが多いためだ。たとえば、倫理に反するようなことや、道徳的にいかがかとといったこと、さらには、わけがわからない、きちんと着地しない、といった「不条理」「異形」も小説ならばできる。マイナ故に自由なのだ。少人数ならば、その新しさがわかってもらえるし、一定のファンはついてきてくれる。漫画でも、雑誌によってはこれができる。しかし、TVや映画になると、もっと大勢が対象となるため、どうしてもその「棘」を抜かなければならない。広く誰にも愛されるもの、大勢が納得するもの、さらにどこからも文句が出にくいもの、を作らなければ商品として成功しないからだ。

僕は日本のTVが見られないところに住んでいる。

『スカイ・クロラ』を書いたときには、自分ではこれが限界だと感じた。つまり、これ以上のものは書けないだろうという意味で、最高傑作だと確信した。しかし、さきほどの数字を見てもらえばわかるが、単行本もノベルスも文庫も、初版のあとはゼロが続いていて、なかなか増刷にならなかった。自分で良いと思っても、売れない。自信作というのは、往々にしてこういうものらしい。それが、アニメ化のおかげで息を吹き返したというわけだから、実に幸運だった。

そんなわけで、「記念品を作しましょう」といった話になる。たとえば、森博嗣がよく登場させる「のんたくん」という小熊のキャラがいるのだが、このぬいぐるみを作ったことがあった。ぜんぶで100匹作って、半分くらいは読者に抽選でプレゼントした。編集者や親しい作家の友人にも配ったが、まだ30匹くらい残っている（友達が少ない証

抛だ)。のんたくんは、もともと僕が持っているぬいぐるみなので、ぬいぐるみがぬいぐるみになっただけである。

僕自身は、ネット上の掲示板で、ファンの人たちにアイデアを募集したことが幾度かあった。たとえば、面白いタイトルはないか、とかである。あるときは、SFを書こうと思って、そこに登場するアンドロイド（人造人間）に、オリジナルの名称が欲しいと考えた。SFというのは、そういったディテールがキモなので、自分でも何か月か考えたが良いものが思いつかない。そこで公募をしたのだ。しかし、やはりこれといったアイデアは出なかった。ただ、大勢の意見を聴くことで、自分の頭の中でなにか活性化するものがあつたのかもしれない。ほどなく、「ウォーカーロン（walk-alone）」という名称を思いついた。これで、もう何作も書いている。タイトルもそうだが、たった一語であっても、オリジナリティがあれば、物語はあつという間に書けるものだ。その新しい言葉に牽引力のようなパワーがある。

買ったものは、不動産も模型も自動車もそのすべてを今も所有しているが、土地は近い人に貸しているし、自動車は友人に預けているものが多い（ほとんど、譲ったようなものだ）。模型はいちおう大部分を自分の近くに置いているが、引越をするときには、模型だけで4トントラック7台分にもなる（僕が遊んでいる模型は、皆さんが想像するものよりサイズが大きいためだ）。

結局、これでも、稼いだ額（税金を引かれたあとの額）の半分も使えていない。引退をして、今後は仕事も減っていくはずなので、残りの金を「自己年金」として生きていければ良いだろう、と考えている。食べることや、着ることや、飲むことなどに興味がないし、博打もしないし、同性異性に限らず人づき合いをしないので、金の使い道がない。当然ながら、投資にも興味がない。現金は利子のない預金にしている（銀行倒産時に全額が保護されるため）。

おそらく、今小説家になりたい人は、これまでの小説家像に憧れ、それを目指しているのだろう。しかし、これからの小説家像は、そのとおりではない。ここまで書いてきたように、よりマイナになり、つまり同人誌作家に近づく。作家の数は増えるが、しかし、読者の数は増えない。必然的にシェアを奪い合うことになるから、平均すれば、半プロ作家が増える。これは、音楽業界でも同じだろう。AKB48などが、そもそもマイナさを売り物にして登場したのだが、今ではそれがメジャもメジャ、トップになってしまった。

新人は、新人賞で作品を募集して発掘される。小説家志望者も、この登竜門を目指して投稿してくる。そういった古来の文化がまだ今も健在だ。特に今は、リタイアした高齢者がけっこうな割合で挑戦してくるし、また、若い世代でもまだまだチャレンジャが跡を絶たない。

アマチュア作家にとって、なによりも欲しいのはリンクなのだ。つまり、宣伝である。個人では人脈に限界がある。それこそ、突拍子もないことをしないかぎり目立たない。志望者が多いだけに埋もれてしまう。情報発信はできても、今は情報が多すぎて、誰も目を留めてくれないからだ。

「書けなくなる」ということがあるらしい。僕は、その心配をしたことがないし、スランプというものを経験したこともない。どうしてかといえば、僕は小説の執筆が好きではない。いつも仕事だからしかたなく嫌々書いている。小説を読む趣味もない。この仕事がさほど好きではないし、人に自慢できる価値があるとも認識していない。スランプにならないのは、このためだと思われる。

「好きだから」という理由で書いている人は、好きでなくなったときにスランプになる。「自慢できる」仕事だと思っている人は、批判を受けるとやる気がなくなる。つまり、そういった感情的な動機だけに支えられていると、感情によって書けなくなることがある、ということのようだ。

それに比べれば、仕事で書いているかぎり、スランプはない。書けば書いただけ稼ぐことができる。人の心は人を裏切るが、金は裏切らない、ということか。守銭奴のような物言いになるけれど、これは正直なところである。仕事という行為は、例外なく守銭奴になることだ。

そういう意味では、小説家以外の職業、あらゆる職業でも、まったく同じことがいえるだろう。近頃は、仕事に「やり甲斐」を求めたり、「憧れの職業」などといった幻想を持ったりする若者が多い。それは、そういったイメージを植え付けようとする勢力があるからだが、実社会にそんなものは存在しない。幻想なのである。

少なくとも、浮き沈みのない作家だった

デビューして今年（2015年）の4月で19年になる。その間に国内で印刷出版した本は、278冊、総部数は約1400万部、これらの本が稼いだ総額は約15億円になる。1冊当たり約5万部が売れ、約540万円を稼いだ計算になる。

あのときがピークだったというほど売れていた期間もないし、どの本がもの凄く当たったということもない。第1章の印税収入の推移で示したとおり、ほとんどコンスタントに利益を挙げていた。引退して仕事を減らしたところ、収入も半減した。つまり、仕事量に比例しているということである。

デビュー以来、すべての仕事を通して、僕が最も意識

していることは「新しさ」である。新しさを生み出すこと、新しさを見せること、それが創作者の使命である。「使命」というと格好が良いが、もう少しわかりやすく表現すれば、「意地」だ。それが、それだけが、プライドを支えるもの、アイデンティティなのである。

これからこの業界へ飛び込もうとしている人だけでなく、もっと違うジャンルでも良い、もしかしたら、創作に限らずあらゆるビジネスに通用するかもしれない。つまり、「新しさ」をいつも自分の頭から絞り出すこと、それが、人が生きていくうえでも非常に重要な目標だ、と僕は信じている。

そして、「新しさ」はほとんどの場合、周囲から理解されない。新しさにも、受け入れられるものと、受け入れられないものがあるはずだ、と思う人も多いだろう。しかし、受け入れられるような新しさは、もうあまり残っていないのだ。世の中には、頭の良い人間がいくらでもいて、たいてい、そういった万人が認める新しさは、たちまち消費されて、既に新しくなくなっている。ということは、残りものの「新しさ」は、一見つまらないものなのだ。可能性を見つけて、いかにそれを加工するか、そこに頭を使わなければならない。自分なりの納得できる理屈が必要だし、自分なりの工夫が不可欠でもある。その理屈も工夫も、新しいことが望ましい。

自分が良いと思えば、その新しさで作品を作る。案の定、みんなが批判するだろうけれど、そんなことを気にしてはいけない。自分の理屈を信じて突き進めば、そのうちに賛同者がぼつぼつと現れ、いずれ本物の「新しさ」として認められることにもなるだろう。

大勢を相手にするビジネスだから、認めてもらわなければ成り立たない。そこへ、認められなくても良いものをぶつけていけ、という矛盾した話である。どんなジャンルでもそうだが、結局、なんらかの自己矛盾を持っていることが成功の条件でもある。コンピュータのように完璧な理屈に基づいた計算で弾き出されるようなものではないし、それこそが人間に求められる「才能」という表現の意味なのだ。

したがって、小説家になるためにはこれこれこうしなさい、といった既存の「ノウハウ」に惑わされてはいけない。とにかく自分の作品を書けば良い。「手法」はいつでも良い。